

## 忘れられた叡智を求めて

第17回

二月二日の福島原発事故は、「パンドラの箱」を開けてしまった。

原子力に対する幾つもの疑問。これまで、あまり明確に議論することなく、密やかに箱に封じておいた諸問題。

この事故を機に、多くのメディアと国民が、その答えを求め、声を挙げ始めている。

それは「原子力・七つの疑問」と呼ぶべきものである。

第一が、「原子力発電所の安全性」への疑問。

しかしそれは、単なる「技術的安全性」だけではない。実は「人的・組織的・制度的・文化的安全性」こそが問われている。例えば、安全審査において、経済性への配慮で安全性が軽視されていないか、といった疑問である。

第二は、「使用済燃料の長期

## 「原子力・パンドラの箱」いま国民が問う七つの疑問

保管」への疑問。

今回の事故が教えたのは、使用済燃料プールが、ある状況では『剥き出しの炉心』になることの怖さである。格納容器が無い状況で燃料の溶融が起ころうことは、想像を絶する最大のリスクである。

従って、今後、全国の使用済燃料プールの安全性が改めて問われるだろう。そして、各原発サイトのプール容量が満杯に近づいていることの問題が、指摘され始めるだろう。

第三は、「核燃料サイクルの実現性」への疑問。

核燃料サイクルの要である高速増殖炉や再処理工場は、常に、その実現が先送りされてきた。あたかも、砂漠で遠くに見えるオアシスに近づくと、また遠ざかっていく現象のごとく、「ミラージュ（蜃気

楼）計画」と揶揄されるものとなっている。

第四は、「放射性廃棄物の最終処分」への疑問。

かねて、核燃料サイクルのアクレス隼は、高レベル廃棄物の最終処分と言われてきた。これを実現しないかぎり、原子力は「トイレ無きマンション」と言われ続ける。そして、福島原発事故によって、この問題は、近未来の問題ではなくなった。炉心溶融を起こした原子炉は、まさに、この高レベル廃棄物そのものだからである。さらに、汚染水処理や廃炉、土壌除染などに伴って、膨大な放射性廃棄物が発生していく。

第五は、「環境中放射能の長期的影響」への疑問。

比較的低濃度とはいえ、広域の環境中に放出された放射性物質の人体に与える長期的影響については、いまだ明確な医学的知見が確立されていない。そのため、対策は、最も厳しい仮定に基づき実施せざるを得ない。

第六は、「社会心理的な影響」への疑問。

こうした問題から生じる社会不安や風評被害、その対策費などは、すべて社会的費用

＝国民負担になっていく。

それゆえ、第七は、「原子力発電の安価性」への疑問。

以上の安全対策費用、核燃料サイクル費用、廃棄物処分費用、社会的費用などを考えたとき、原子力とは、本当に安価なエネルギーなのか。その疑問が突きつけられる。

我々、原子力に携わってきた者は、この国民の疑問に真摯に答えなければならぬ。



田坂広志

〔多摩大学大学院教授  
シンクタンク・ソフィア  
バンク代表〕